内地帰還ニオケル所感　昭和二十一年二月十日

所属部隊	第二十八師団軍医部
官等級	陸軍衛生軍曹
氏名	[redacted]
所在地	宮古島　野原岳

元より、この体、國に捧げしものと、万が一の生還を期せざりしに、畏き終戦の詔勅を拝して、前途に新使命を擔ふ者であることを自覚するとき、誰か無量の故郷の土を踏まんことを希求せざるもの有るべき。終戦以来将に半歳、百千秋の思ひにて待ちこがれたる復員出発も見送るもの以外、なきものの只興奮の内にテンプを切り米船ダンテ号に身を託せり。あゝ我本土に帰るは彼の船によるなし。かくして彼等の責任ある接するに従って不快の感をいだかしめざらしは将来指導的立場にある彼等として尤も行ふ能はざるべし。ふるさと、活ける来船にて帰還を喜ぶ者多かりしをみても知らざりし。途中沖縄本島を過ぎ、激戦の跡を偲べば、山空に散りし我が幾万の英霊、又敵なりとは言へ同じく祖国の為に護国の鬼と沈みし彼等幾万の霊に対しても、只深く首を垂れてその冥福を祈り、島と海を渡りしてこそ生きて帰れりしか、吾が胸にも白木の箱の人となりて戦友の胸に抱かれて帰還する者もあり、己を顧みて何か責任どの顔を以て故郷に帰れようか、互いに流れ合はなかりしものを、五尺肉体朽ちるまで、何ぞこの心を以て必ずば新日本再建を期せざらんや